

教師の指導行動が児童の自己成長感に及ぼす影響 —自律性、有能性、関係性の欲求の充足と変化を媒介として—

○石田靖彦 (愛知教育大学)

下岡奈央 # (岩津小学校)

キーワード：教師の指導行動、心理的欲求の充足と変化、自己成長感

問題と目的

Connell & Wellborn (1991) の基本的心理欲求理論では、社会的文脈としての教師の「方向づけ」「自律性支援」「関わり合い」が、児童の自律性、有能性、関係性といった心理的欲求を満たし、児童の内発的動機づけや学習行動、自己成長感に影響を及ぼすと仮定されている。

本研究では、教師の学級での指導行動が児童の 3 つの基本的欲求 (自律性、有能性、関係性) の充足と変化に着目し、それを媒介として児童の自己成長感に及ぼす影響について検討する。

方 法

調査対象 小学校 5, 6 年生 437 名 (男子 205 名, 女子 229 名)。2016 年 10 月～11 月に実施した。

調査内容

1) 教師の学級指導行動：石田・下岡 (2017) の「教師の学級指導行動尺度」を使用した。この尺度は授業場面での 3 つの指導行動 (「発言の促進」「目標設定と評価」「関わり合い場面の設定」「児童の主体性の尊重」) と、授業以外の場面での 3 つの指導行動 (「教師と児童の関係づくり」「児童同士の関係づくり」「児童の主体的な学級運営」) の 7 つの下位尺度計 28 項目で構成される。児童には、担任の教師について「そう思う」～「そう思わない」の 4 件法で回答を求めた。

2) 児童の 3 つの心理的欲求の充足：西村・櫻井

(2015) の「基本的心理欲求充足尺度」を表現を若干変更して使用した。「そう思う」～「そう思わない」の 4 件法で回答を求めた。

3) 児童の 3 つの心理的欲求の変化：2) の尺度項目について、この 6 ヶ月間での欲求の変化について「弱くなった」～「強くなった」の 5 件法で回答を求めた。

4) 児童の自己成長感：神藤 (1998) の「自己成長感尺度」の中から 5 項目を抽出し、表現を若干変更して使用した。「あてはまらない」～「あてはまる」の 4 件法で回答を求めた。

結果と考察

教師の 7 つの学級指導行動は相互相関が高かったため、学級指導行動として 1 つにまとめた。児童の自律性、有能さ、関係性の欲求充足についても相互相関が高かったため、1 つにまとめて「児童の欲求充足」とした。欲求の変化についても同様に、「児童の欲求の増大」として 1 つにまとめた。そして、教師の学級指導行動が児童の欲求の充足と変化を媒介として自己成長感に及ぼす影響について共分散構造分析を用いて検討した。結果を Figure 1 に示す。結果から、児童の自律性、有能性、関係性欲求を充足させるような教師の学級指導行動は、単に児童の欲求充足にとどまらず、それらの欲求をさらに増大させ、それが自己の成長感に繋がっている可能性が示唆された。

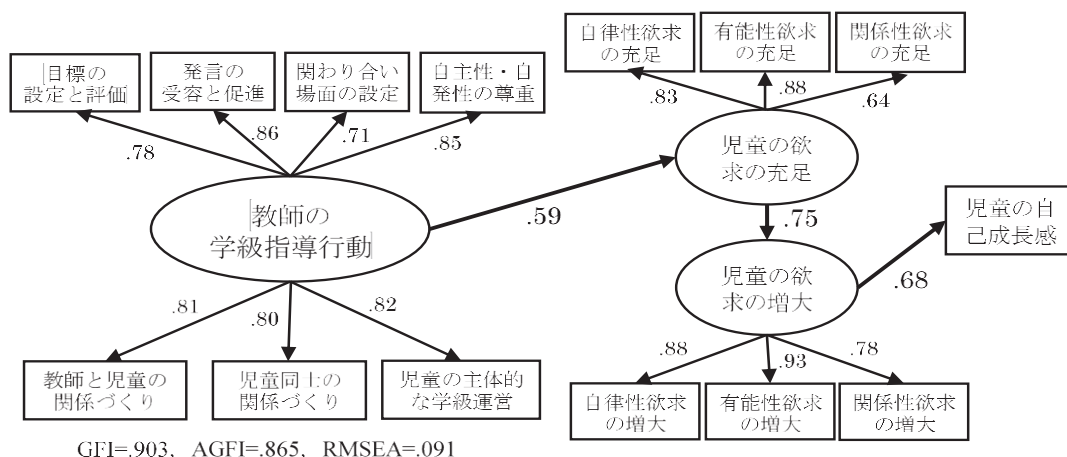


Figure 1 教師の学級指導行動が児童の欲求充足と欲求増大を媒介として児童の自己成長感に及ぼす影響